『比較日本文化学研究』第14号（2021）

論　文

苦力からみた〈民族協和〉

―― 牛島春子「苦力」を通して ――

郭　　璇

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

The Image of *Racial Harmony*

―― Through Haruko Ushijima's *Coolie* ――

Xuan GUO

Abstract: *Racial Harmony* was the founding declaration of Manchukuo（which is called the Puppet State of Manchukuo by Chinese）, the puppet regime established by the Japanese colonists in China in 1932. This declaration, which was widely consented by colonists, also became the background for several literary works. This paper aims to study the image of *Racial Harmony* through the novel *Coolie* by Haruko Ushijima, who was one of the most representative female writers of the Manchurian literature. First of all, this paper analyzes the partnership between Japanese supervisior and Chinese coolies in order to reveal how the dream of *Racial Harmony* is expressed by the work. On the basis, this paper examines the problems reflected in the works,to reveal Haruko Ushijima's nationalism reflected from the image of coolie, and her emotional confliction. As a result, this paper shows that coolie is only a subject included by the colonial policy theory, the reality deviated from the declaration, and also points out the limitation and paradox of Haruko Ushijima.

Keywords: Manchurian Literature, *Racial Harmony,* Coolie, Supervisior, Nationalism

一、はじめに

1931年の満洲事変を経て、翌1932年に日本政府は傀儡国家「満洲国」を作り上げ、実質的な植民統治を開始した。「満洲国」成立にあたっては、〈王道楽土〉〈民族協和〉という建国宣言が高らかに歌いあげられた。当時、この理念に共鳴した人々は多くいたが、そのなかでも牛島春子は、その信念を作品のなかに反映させたという点で、注目すべき作家である。

牛島春子は、川村湊が分類した満洲に関わる文学の３類型のうち、２番目

の「満洲に移住し、居住者として生活しながら文学に携わった人々」[1]のそれに属し、「満洲文学」の代表的な女性作家といえる。彼女の渡満は副県長夫であった牛嶋晴男に同行するというかたちで始まり、当地では恵まれた環境の下で過ごした。その間に春子は、満洲及び当地の人々を観察し、それらを題材とする「満洲もの」を創作した。代表的なものとして、「王属官」（1937年５月22日から６月３日にかけて「大新京日報」に連載、同年第一回建国記念文芸賞二等一席となった）、「祝といふ男」（1940年９月27日から10月８日にかけて「満洲新聞」に発表した。1941年芥川賞次席となり、『文藝春秋』に掲載）、「張鳳山」（1941年、『文學界』に発表）がある。これらの作品はいずれも、満洲国の政治システムのもとで、県庁の参事官（のち副県長）を補佐しながら、県の行政を進め、満人と日本人との架け橋としての役割を果たした満人労働者を描いている。

本稿で扱う「苦力」は、上記の代表作ほど有名ではなく、ほとんど注目されていない[2]が、春子が満人労働者に注目し、彼らを満洲文学の公式のテーマの〈民族協和〉〈王道楽土〉を体現する存在として描いたという点で、重要な意味をもっている。

本稿では、作品における春子の苦力像に注目し、〈王道楽土〉、〈民族協和〉といった〈夢〉がどのように苦力を通して表現されたのかを考察する。その上で、〈民族協和〉の表現の問題点と、そうした苦力像に投射された春子の苦力認識と、〈民族協和〉への考え方を探っていくことを目的とする。

二、牛島春子と「苦力」

牛島春子の渡満は、夫の牛嶋晴男と関わっていたと前述したが、その具体的な経緯を彼女の生涯とともに紹介してみよう。

牛島春子は1913年久留米市本町に生まれ、1929年３月に久留米高女を卒業したが、その頃にはエンゲルスの『共産党宣言』やブハーリンの『史的唯物論』などを読み、労働運動に関心を持っていた。1931年には日本足袋久留米地下足袋工場で働き始めたが、日本労働組合全国協議会の組織に参加したことが会社側に発覚し、半年で解雇された。1932年には、共産党員の全国一斉検挙で逮捕され、２ヶ月拘留されたが、起訴猶予で釈放された。しかし、1933年に再逮捕され、拘留所で転向理由書を書くよう求められた[3]。

こうした活動の最中、1931年に春子は労働運動の集会で当時九州帝国大学

法文学部の学生である牛嶋晴男と出会った。その後、1933年に保釈中の春子を訪問したときには、晴男は休学中の身でありながら、九州帝国大学の鹿子木員信[4]教授に師事し、その下で学ぶ青年達と交友していた。

翌1934年に晴男は九州帝国大学法文学部を卒業し、当時満洲南部の錦州の部隊で経理担当の労務系をしていた鈴木春造[5]主計大尉を頼って満洲に渡り、一年ほど鈴木の下で中国人苦力の監督をした[6]。1935年５月、彼は「満洲国」の大同学院[7]に入学し、同年10月第４期生として卒業して奉天省属官となり、1936年当地で新婚生活[8]を迎えた。満洲に渡ることは春子にとって、「日本から逃げ出したくてしょうがなかった」ために「満洲のことを深く考えもせず、いい加減な気持ちで行った」[9]ものだったと言っている。すなわち、労働運動に参加し、全国一斉検挙により２回逮捕され、転向を強いられた牛島春子は、プロレタリア文学者と同じように、日本では居場所を失い、満洲に渡って生活せざるをえなかったのである。こうしたマルクス思想に影響され、社会運動に参加した経歴が、後の「苦力」をはじめとした社会最下層にある民衆達への関心の底流となっていると言えよう。

奉天での生活は一年ほどで終わり、1937年の秋、晴男はハルビンよりさらに北の龍江省拝泉の副県長に任じられ、春子もとともに赴任した。春子の「満洲もの」の多くは、拝泉での生活のなかで創作されたものである。

「苦力」は、『満洲行政』（第四巻十号、1937年10月）に発表された短編小説である。錦州時代の晴男をモデルとする苦力監督の野村新二が、六人の常雇苦力との葛藤を経て、彼らから友情と信頼を獲得し、民族を超えた信頼関係を構築していく過程を描いている。前述したとおり、この作品はほとんど注目されておらず、背景を探る関連資料も少ないため、ここでそれらを整理しておく。まず、作品が掲載された雑誌『満洲行政』は満洲行政学会が1934年12月に創刊した行政雑誌であり、『地方行政満洲版』の後継誌である。『満洲行政』は、『地方行政』より文芸作品（創作）の欄が増加し、「全面的に満州国の啓蒙に寄与」する総合的な雑誌を目指している[10]。しかし、西田が整理した「『満洲行政』文化系主要目次」から見ると、やはり「行政問題」がメインである。他方で、「苦力」と同号に掲載されたもう一つの「創作」として、長谷川濬の「或る生活」がある。これは、「日満連絡船」で知り合った男女が意気投合し、「新京」に行って同棲するという、満洲に渡った日本人の生活を描写する話である。こうした文芸作品の存在は、創刊の辞「日満両国民の融

和親善と満州国の啓発指導のため」といった国策に合致しているように見える。しかし、晴男もまた1935年８月[11]から満洲の農村貧困問題をはじめとした一連の行政問題の考察をこの雑誌に続々投稿していた。このことから、春子は、夫の紹介を通して投稿した可能性が高い。また、晴男が1934年に錦州で苦力監督として働いた時期に、春子はまだ渡満していなかった。つまり、春子は平林たい子のように苦力と監督の生活を直接観察したことがなく、夫から伝え聞いた苦力と監督の状況を作品に書き込んでいる訳である。坂本正博の整理した年譜[12]によると、「王属官」が1937年春に執筆された満洲での第一作で、その次に発表された「苦力」が満洲での第二作であることから、「苦力」の執筆は同年春から10月までの間に奉天で創作されたと推定される。次節では、〈民族協和〉、〈王道楽土〉がどのように表現されたのかを、野村と苦力双方に関する表現を通して考察する。

三、作品「苦力」における〈民族協和〉

3.1　野村の「温情主義」

前述したように、作品は、第三人称の形式を採用しながら、日本人監督野村の視点で叙述している。野村は、「実家は２丁ばかりの田を持つてゐる自作農」（28頁）であったが、「故里の大学に未だ学籍」（22頁）を残したまま、南満のある「軍経理部派出所」（21頁）に来て監督をしている。また、八ヶ月の後、「新京の××学院に入るため派出所をよして苦力達と別れ」（25頁）ている。これらのエピソードは、晴男の経歴と合致している。また、冒頭で描かれている野村の風貌は、「垢光りのした制服に、穴の明いた角帽を被」（21頁）り、「角帽に上衣が学生服かと思ふと、下が軍人用の乗馬ズボンに長靴」（22頁）といった「ちゃんぽんの格向」（22頁）とするので、農民出身で一種の素朴さを持ち、学生気質からまだ抜けきれない新人官吏の姿が鮮明に現れている。

野村と六人の常雇苦力との初対面の際、苦力たちは「垢と脂で煮〆たやうな着物を着て、あばたの顔や、そつぱの顔」（21頁）をしており、「睨むやうな目付で」（21頁）野村を注視している。また、傍に寄っていく、「ムンとへどの出そうな臭ひ」（21頁）がした。汚い、悪臭い、見苦しい、冷たいという苦力の描写は、夏目漱石の苦力への第一印象と類似している[13]。また、ここで野村が「睨むやうな目付」を感じたのは、苦力たちが日本人監督への敵対

心と不信の気持ちを抱えていると彼が思っていたからであろう。また野村は、「苦力なんかを、まともな人間だと思つたら大違ひでさ。あいつらにや後からピストルをつきつける位にしてこき使はんきや、とんでもない事をやらかすに極つてますよ」（21頁）と他の日本人から聞かされている。実は、苦力たちは野村の前任の日本人監督に暴力を振るわれた経験があった。そのため彼らは、日本人の監督に対して憎みを抱えていた。一方、学生気質がまだ抜けてない野村は、いかにも仕事経験がなさそうに見えたはずである。そのため苦力たちは、いかに自分たちを指示するのかと野村の能力を疑っているのであろうと林雪星が指摘している[14]。

しかし野村は、就任初日に苦力たちに睨まれたものの、他の監督が暴力で苦力を用いるのと違い、自分が暴力を使わず、「温情」で「立派に苦力を使ひこなして見せる」（22頁）と意気揚々と決意した。つまり、苦力たちから敵対心と不信の気持ちを持たれても、野村は自然なこととして受け取り、何ら後ろめたいところはない気持ちで苦力に親善を示した。

そうしたなかで注目されるのが、彼の「温情主義」の試みである。まず彼は、苦力に対して「一寸した過失も大目に見てやる」（22頁）と「寛大な態度」（22頁）を取っている。また、苦力を慰労するために、休憩時間に桃や西瓜を買い、彼らにふるまう。さらに、常雇苦力の「面子を立てゝやる」（27頁）ようにし、彼らを苦力頭に任命して、一人ずつ臨時苦力を割り当てた。そして、苦力と一緒に露天市場の満人町まで遊びに出かけている。それ以外、苦力の請負業を介して支給された不合理な賃金制度を直接渡ることを提案したり、また順番に当直の出勤制度を考えたりした。

苦力にこのような態度をとる野村が、六人の常雇苦力の名前を覚えるエピソードがある。

> 「君の名は何んと云つてたかね」と野村は日本語の話せる苦力の方を向いた。
> 「わたくしは張と云ひます」とその苦力は国語教科書を読み上げるやうな調子で云つた。この張は恩田の話によると中等学校を二年まで行つてゐて、日本語を其處で習つたと云ふのであつた。みなりも一番小さつぱりしてゐて頭が働き、苦力きつてのインテリらしい格をもつてゐた。
> 「うん張か、あゝそうか。シボレーと云ふのはどれだ？」…（中略）…まるで絞り模様のやうに顔一面あばたのある苦力が、長い顎を突き出して、つり込まれたやうににやつとした。（25頁）

引用はやや長く、内容を全て取り上げてはいないが、この後野村は、日本語を話せる「張」、「シボレー」に加えて、野村より年の多い「老頭児」、張よりも一つ二つ年下の「小張」、背が高い「王」、さらに二三人の若者に一人一人丁寧に名前を尋ね、またその顔と名前が対応するように、苦力の顔を近距離で観察している。

同じく苦力と監督の関係に注目し、苦力を積極的、能動的に造形する平林たい子[15]でさえ、このように一人一人の苦力の顔にクローズアップするまでには至っていない。また野村は、「苦力達の顔を近々と見ると、汗と垢に汚れた顔のどれにも、その臭ひから野村のもつてゐるのと同じやうな、あの清新な輝やいた若さが、丁度涙の中から沁み出てゐる清水のやうに清冽にのぞけてゐるのである」（25頁）としている。ここで野村は、苦力との近距離の接触により、彼らの「臭い」や「汚れ」をこの瞬間、「清新な輝やいた」ものと感じ、「涙」が出るほど感動している。ここでは、人情味あふれる日本人監督像が描出されている。

3.2　言語学習

野村の〈民族協和〉のもう一つの表現として、満洲語の学習が挙げられる。異民族間では、言葉が一番の障碍であり、その壁を超えなくては意思の伝達がうまくできない。この時代の作家たちは通常、日本人と満洲苦力を、言語の壁の問題を考慮せずに登場させているが、春子はその壁を超える試みをした。当初、野村は日本語を話せる苦力「張」を通して命令を伝えたが、やがて中国語を勉強しはじめた。「温情」の策と並び、これも野村が苦力達に受け入れられるために採った方法であろう。

休憩の時に、野村が「急就篇を聲を出して読み始めた（中略）」（26頁）という場面がある。『急就篇』はもともと前漢末の史游の作と伝えられる漢字学習書であったが、満洲時代の日本人の間では、宮島大八の著した『急就篇』（1933）が流通していた。この宮島バージョンの『急就篇』は、中国語のみの教材であり、選び抜かれた会話に加えて故事や古典も紹介し、中国の文化を理解するためのレベルの高い教本である[16]。

ただし、満洲に来たばかりで、最初苦力との交流は「一生懸命手を振った」（22頁）といったボディランゲージしか出来ず、満洲語を完全な形では話さない日本人が、このような高いレベルの教材を活用しきれたかどうかは疑わし

い。『急就篇』は野村にとって、うまく仕事を回すため、また苦力の心を掌握するため、人間関係を築くための「懐柔策」の一つにすぎなかったのであろう。林も「言葉の勉強」の意義について、一つは「直接苦力に自分の意思を伝達することができるし、いち早く満人の世界に受け入れ」られるようにすること、もう一つは「自国の文化、言葉だけが優れて、他国の文化、言葉を見下すはずはないと思われ」[17]るようにすると指摘している。支配者側の人間として、被支配者側の言葉や文化を勉強することは、自分の「矜持」を脇に置いて、好意を示すことであり、〈民族協和〉の表現であると春子が考えたのであろう。

他ならぬも、「満洲語」を一つの道具として使い、低階層におかれた当地の人々と親しくなった。彼女は、拝泉での生活の思い出を随筆「私の童話」(1941年１月「満洲観光聯盟報」[18]満洲観光聯盟刊）で以下のように書いている。

> 私はまめらぬ満語でだけどいろいろな人達とよく話した。もともとあまり社交的な女でない私は乏しい満語を使ひ果して立往生してしまつたり、意味が通せず間の悪い思ひをしたりしたこともたびたびだつたけれど、農家の子供やお婆さんや姑娘はみんな本當に氣持よく私にしたしんでくれた。
> 私につかへてくれた藪にらみのボーイも、鼻のもげた縣公署の馬夫も、ひげの先に氷の玉をびつしよりつけて水運びをしてくれる、水汲みも、みんな私の友達であった。(98頁)

ここでは、副県長夫人である春子が、周囲の中国人との交情を、ある種のノスタルジアにかられて回想している。この内容と掲載誌から見れば満洲の風物と人情を宣伝するために、満人と日本人との関係をある程度美化し、〈童話化〉している疑いがある。しかし、こうした文章からは、異民族とは、言語によって心が通じ合えると春子が考えていたことが読み取れる。実際に苦力たちも、「熱心に自分達の言葉を勉強してゐる」野村に「自然と親しさを持ち始め」(26頁)、両者の間にあった「障壁が自然と取り除かれ」(26頁）てしまったという。

3.3　野村を受け入れられた苦力

春子が描かれた「民族協和」は最初からではなく、双方の互いの努力によって築かれたことである。最初のころ、苦力達は「野村に無愛想で、親愛の情をしめそうとはしなかつた」(22頁）が、野村の温情主義や言語学習によっ

て親しみを覚え、完全に彼を受け入れるようになった。小説の最後は、野村が西瓜屋に代金をごまかされた際、苦力達が立ち上がって、西瓜屋と喧嘩した場面である。その描写を見てみよう。

> 「多児銭？」と聞くと、
> 「両個子児」と云ふ。…（中略）…
> 「五個子児麽？」と聞いた。西瓜屋はうんうんうなづきらがら、「一切れ五銭だかた、七切れで三十五銭、十銭つりをやつただらう」と云つた。
> …（中略）…
> 「どうした？」野村が聞くと張はせき込んで「これ悪いです。一つ二銭を一つ五銭と云つて、お金取らうとしました。」それから又西瓜屋の方を向いて、
> 「この大人は曲つた事が大嫌ひなんだ。良い事をするとほめて呉れるが、悪い事をするととても怒るんだ。そう云ふインチキをすると大變だぞ、と云つたやうな事を西瓜屋に云つてゐるのである。（29頁）

西瓜屋はひと切れの西瓜に「両個子児」[19]と云ったが、まだ中国語がよくわからない野村に「五個子児」[20]として売った。こうした西瓜屋の不正に、愛嬌の好い張が急に「顔色を変え、恐ろしい権幕で西瓜屋に喰つてかかりだした」（29頁）。張だけでなく、小張やシボレー、老頭児などの常雇苦力たちも「口々に怒鳴り出」（29頁）し、西瓜屋と喧嘩する態度を示した。また、野村がおつりを取ってからも、張たちは「未だぶつぶつ云つてゐた」（29頁）。ここでは、林は「大人」という言葉について「日本統治期の台湾では警察に対する呼び名」[21]と指摘し、到底中国語では高位にある人、また権威を持っている人への尊称である。苦力達にとって野村は権威と敬意の対象になったといえよう。彼らは野村の「温情主義」に心を打たれ、完全に野村の味方になって、庇っていたのである。その結局、その一日終わり帰った野村は彼ら達の怒った顔を思ひ浮かべると、「とても幸福に感じ、これ以上何も欲しくないと云ふ様な氣持にさへなる」（29頁）のであった。

以上のように、日本人監督である野村と苦力との間に、民族を超えた信頼関係が築かれた。しかしながら、〈民族協和〉〈日満親善〉はうまく表現されているように見えるものの、問題点も存在する。

四、〈民族協和〉の表現効果－問題点

4.1 「指導民族」としての優越感

川村湊は〈民族協和〉について、それは日本人が指導する〈民族協和〉であったと理念の虚偽性と実質を指摘した[22]。現実中、日本人植民者は、「指導民族」としての優越感から完全に脱することができなかった。彼らが植民される側を教育しようとする傾向が春子の作中にも露出している。

野村は、赴任して最初の二三日、苦力に対して寛大な態度を取っていた。ところが、仕事の効率は上がらず、かえって苦力たちの横柄、傲慢な態度を招いてしまう。その後野村は、遅刻をして悪びれもせず、怠けている苦力を容赦なく殴りつけ、その苦力に頭を下げさせた。また、この場面で野村は「過失は誰れにもある事で仕方がないが、わざと怠けたりなんぞすると、承知するもんじゃないぞ」（23頁）と怒鳴り説教した。彼は、適当な鞭を使わなければ仕事の能率が上がらない苦力を「現金な奴」（24頁）と認識し、時間厳守を教育した。この点について鄭穎も言及し、「「満洲」時代の日本人はコロニアリズムの本質を見極めなかったゆえに、苦力を強制的に働かせるのがいかに人権侵害であるかを認識できなかった」[23]と指摘している。

このような、「被植民者」の過ちを指導し、また教育すべきであるという「使命感」は、春子の他の満系作品にも確認できる。そうした作品の一つである「牝鶏」は、『満洲よもやま－皇軍兵士慰問文集』（1940年６月）に発表された短編小説である。ここでは、やはり人情味あふれる日本人副県長森崎が、「満人」の女性を教化する傾向が見られる。あらすじは、小地主の農民朱徳新が、怠け者で浮気な満人の妻鳳琴に逃げられ、森崎に仲裁を頼み込み、やっと女房を取り戻し、二羽の牝鶏と卵を御礼として副県長に届けるというものである。こうした展開のなかで、森崎は鳳琴に以下のように話している。

> それは君考へちがひだよ。大體満洲では嫁さんの方が婿さんより三つも四つも七つも八つも年が多いから、婿さんが働きざかりになつた時には、嫁さんは一足先に老けこんでしまつて顔には皺が出来すつかりお婆さんになつてしまふ。婿さんは又若い美しい嫁さんが欲しくなつて来る。それで満洲では二人も三人も奥さんや妾を置くやうなことになるんだよ。日本ではみんな婿さんの方が嫁さんより年が多いから一夫一婦主義で圓滿に行くのだよ。…（中略）…女は一度嫁ぐとそこが一生の死場所であること。女の幸福と言ふものは結局はよき妻であり、よき母親であることこそが最上のものであること。（72-73頁）

ここで、森崎は満洲の一夫多妻といった封建制度がもたらした満人女性の不幸に気づき、この点に同情を示したが、一方で植民地支配という現実を見落としており、彼女達を救う気もなく、逆に「良妻賢母」になるように説教することが窺える。このような満人女性の表象にも、日本女性のほうが「女徳」を身につけ、優位に立っているといった一種の優越感が見られる。

春子にとって、苦力や満人女性は、日本人という指導民族によって教化されるべき対象である。鄭穎が指摘したように、このような、「満洲」時代に多くの日本人が共有した価値観を春子も持ったのであろう。このように春子は、日本人監督と満洲苦力との関係を、〈搾取・暴力〉といった典型的〈二項対立〉の構図から「親しさ」に転換しようとした。しかし、こうしたコロニアルな思想信条のゆえに結局、愚昧や滑稽な苦力像が形作られてしまうのである。

4.2　愚昧の苦力像

作中には、苦力たちの労働内容や労働場面が描かれている。彼らは「ムセつぽいほど石炭の粉や貨物からまひあがるごみで」(22頁) 汚れている空気の中で、「無表情な顔つきで」(22頁)、20貫位の鉄板を、「めり込みそうに首を縮めて、肩で息をしながら持運びの作業を何度も繰りかへ」(22頁) した。また、ある日の仕事は「派出所から一里ばかり離れた所の北大営で、此處の倉庫二つに保管してある食器類を荷造りして、奥地の部隊にあて発送」(27頁) し、「木箱が幾百となく用意されて、その中に、山と積まつた薬罐とか、ニューム椀とか、噴霧器とかを具合よく詰め込んで外から釘をうち縄をかける」(27頁) というものであった。さらに、この場面では、野村は箱に縄をうまくかけない苦力に、「米俵に米を詰めた」(28頁) 時にやる男結びをして見せた。さらに、苦力は「ふーんと云つた顔つきでそう云ふ隠し藝を持つてゐる野村に感心し」(28頁) ていた。この節からは、苦力の懸命の労働現場を表現するだけでなく、野村が仕事の能力で苦力を征服したことを表現しようと春子の意図が見られる。

しかし、たい子が描いた自分の考えと革命的意識を持ち、日本人監督に反抗した苦力像に対して、この作品における苦力たちは、日本人に雇用され、黙って働き、あたかも植民者による支配を甘受している。そして、周知のように、「北大営」は満洲事変の勃発地であり、日中戦争の主要な陣地であっ

た。この作品が日中戦争の直前に描いた作品であったことを考えると、部隊へと供出する「戦時給養」（27頁）に関わって、懸命に働いている苦力たちは、愚かな存在としか見えないのであろう。

こうした愚昧的な苦力は、魯迅『阿Q正伝』の中の阿Qを想起させる。坂本の年譜によると、春子は満洲滞在期、『大魯迅全集』全七巻（井上紅梅等訳、改造社、1937年）を読み込んだことがある[24]。それは1940年の「祝といふ男」執筆時期以降のことであり、作品と直接の関係はないものの、魯迅が苦力の不幸を哀しみ、また彼らが反抗しないことに憤っているのに対して、春子はただ「同情にとどまっ」[25]ていると鄭が指摘している。実は、春子は苦力の労働環境に関心を寄せたものの、根本的に、彼らが支配される側にある境遇を見逃しているといえよう。

4.3 〈民族協和〉と乖離する矛盾－表面化させられた「滑稽」な苦力像

一方、滑稽な苦力の造型も見られる。野村が監督に就任したころ、休憩のとき自分のお金で桃を買い、苦力たちに与えた。しかし、「食へよ」と野村に言われても苦力は「氣持の悪そうな笑ひ方をしてお互顔を見合わせてゐるばかり」（24頁）なのである。そして、「誰も手を出さなかつた」（24頁）苦力に対して、野村が自分で一つずつ苦力達の手にのせてやった。そのときの苦力は、「小學生のやうにきちんとお辭儀をした」「可笑しな奴」（24頁）と描かれている。苦力は野村を「大人」のように扱い、恭順の意を示しているから、自分の与えた桃を食べもせず、ただ笑っている苦力の姿は、野村にとっては不自然なものであったろう。また、彼らが「大人」の前で「小学生」のような態度をとることも、滑稽さを感じさせる。

また、野村は苦力を管理するために、彼らを六組に分け、各組に常雇苦力を一人ずつ割り当てた苦力頭制を考えた。これに対する常雇苦力の反応は、以下のようなものであった。

> 苦力頭にすると聞くと苦力達はもうすつかりそはそはしだした。早速めいめい自分に割り當てられた臨時苦力の所にかけて行き、一人前の苦力頭のやうにあれこれと指圖を始めた。今まで自分達が野村に云ひつけられてゐたのとそつくりの調子を真似て命令してゐる様子が野村には可笑しくて堪らなかつた。彼等はすつかり得意になつて、餘計な所に小言のおまけをくつゝけたりしてゐるのである。（27頁）

苦力頭に任命された常雇苦力は、自分たちが命令する側に回った途端に、野村を真似て振る舞っているのである。本来は他の苦力たちと同じく、使役される境遇にあることを忘れたかのような、常雇苦力たちのこうした態度からは、滑稽な苦力像を描き出そうとする春子の意図が感じられる。

ここで注意したいのは、前述した「指導民族」としての使命感や、愚昧な苦力像は作者も無意識のままに表現されているが、苦力の「滑稽」さは野村の視点を通して、表面化させられているということである。これらの描写は、文字通り苦力を「小学生のやう」に「可笑し」く造型していると同時に、野村の方に分があるように描くことで、双方の関係が対等でないことを顕在化している。ここには〈日中親善〉〈民族協和〉といった建前と乖離した矛盾が見られる。こうした描写からは、春子が苦力の置かれた境遇、また彼らと野村との不平等な関係を意識していたのではないかということが想定される。春子は、苦力は野村に良いようにコントロールされる側であり、両者は心が通じ合いさえすればよいと思い込んでいたのであろう。

後に第12回芥川賞候補作となった「祝といふ男」も、満人労働者である通訳官の視点を通して、日本人統治者と満人との関係を民族的な側面から表現している。作品は、晴男の下働きの通訳をモデルとした祝廉天、晴男をモデルとしたの副県長の風間真吉が相互に補い合いながら為政にあたる様子が描かれている。このように、日本人官吏の満洲行政の一コマを表現するというパターンは「苦力」と同様である。

「祝といふ男」では、「満系らしからぬ一種の険しさ、鋭さ」（78頁）を持ち、日本人よりも日本人的な行動原理で動き、周囲の人間から煙たがられ、いつも傲慢、冷酷といった「複雑な幾つにも分裂した」（84頁）不可解な満人官吏の「祝」が造型されている。作品の後半では、「満州国が潰れたら、祝はまつ先にやられますな」（93頁）と自己の運命を予感した「祝」に対して、風間は「彼はやはり同族の敏感さで、一見忠實に為政にしたがひ、異議らしいことも申立てぬ柔和な相貌の者達の幾部かが、もし一朝ことあつた場合、突然反満抗日の旗をかゝげ、銃をあべこべに擬して立ち上らぬとも限らぬ。さうしたものを嗅ぎ取つてゐたのだらうか」（93頁）と祝の内面を垣間見ている。祝は被植民者側であるが、植民者側に協力して同胞を統治しているため、中国民衆に裏切者と見られ、憎まれるわけである。よって、日本人が支配者

の立場から退かない限り、祝はその身を保全できるが、一旦「満洲国」が崩壊したら、裏切者の祝は裁かれるに決まっていると自身も予感したという。

また、常に拳銃を身につけている「祝」の、「化石」化した冷酷な表情についての分析もなされている。

> ひそかに拳銃を肌から離さぬ祝の心底には何か悲劇めいた匂ひがなくはない。彼には高い教養も、烈々とした高邁な魂も感じられない。彼の正義感が非情な冷酷さと一緒に住んでゐる際、或ひは自分の一身の利害に直接かゝはつてくれば何時でもかなぐり捨てられる正義感なのではないだらうかと疑われて来る。祝を動かしてゐるものは、今は満州国に進んで忠節であることこそ流れに棹さすもつともさかしい生き方なのだという処世上の智慧でしかないやうに見える。(93頁)

いつ崩壊するともしれない「満洲国」の運営に身を投じるわけではない、ただ日本の支配下での処世上の知恵として祝は時局に順応する道を選んだ。彼の「化石」の顔は、自分の心を相手を読み取られないようにするための術であろう。春子は、日本人としての立場を超えて、異民族の「祝」の境遇と選択を理解し、「何か悲劇めいた匂いがある」と共感を寄せている。

一方、小説の結末において、真吉の見送りに際しても「祝の冷たい化石したやうな顔は動かなかつた」(97頁)とあるように、中国人官吏と日本人統治者が終始互いに警戒している様子が見られる。こうした描写は、民族協和の難しさを反映していると同時に、この点に関して春子が、支配者である日本人として自身の無力さを感じていることをも示している。このように春子は、「祝」への理解や共感に向かおうとするものの、結局自分は日本人以外にはなれないという限界を感じているのである。[26]

春子は、「重い鎖－『祝といふ男』のこと」という回想文でも、自己の矛盾に言及している。「『祝といふ男』を書くころ、わたしはいろんな人と知り合った。その人たちはほとんど日本で思想と政治の運動に破れ、傷つき、のがれるように満州にわたってきた人たちだった。そういう人たちはいちようにひかえ目で自分について語ろうとはしなかったが、満州国の官庁や合作社に働きながら自分が他民族にたいしていわれのない支配者であることを知っており、しかもなお、その生活になにか自己救済の道を見出そうと苦慮している…(中略)…わたしはそうした矛盾を内包していた満州という国と、そこにいた人びとにいまでも消すことのできない愛着を感じる」[27]。自身も日本で

社会運動に参加して挫折し、屈折した思いの中満洲に渡り、夫が国策の枠に絡めとられていく春子も、やはり自己自身に矛盾を感じていたのであろう。

このように、「祝といふ男」が人物の内面を深く理解しようとするのに対して、「苦力」では苦力と監督との不平等な関係を意識しながらも、苦力の内面までは語っていないのである。「苦力」は、春子が満洲に渡った1937年に創作された。また、同年５月に満洲での第一作「王属官」が第一回建国記念文芸賞に受賞し、満洲文学作家としての端緒に就いたばかりであったといえる。日本国内で挫折を感じた彼女は、過去を捨て、新生活での生活に入ったという状況の中で、まだ夫の仕事への純粋な期待が大きかったと考えられる。こうした中で春子は、マルクス主義と帝国主義の間で矛盾を感じながらも、夫の為政を支えるため、国策の方にやむをえず傾斜し、苦力について詳しく描写することを避けた可能性が高い。一方、「祝といふ男」の創作の時点では、満洲で３年を過ごしており、当地の人との交流を深める中で、民族関係を強く認識するようになり、心の中に自己矛盾の葛藤が生まれたのであろう。

五、おわりに

「苦力」では、日本人監督の野村は一連の温情主義と満洲語の学習によって、苦力と親しい関係を築き上げていた。苦力もそうした野村のふるまいを認め、彼を受け入れていった。このように、満洲人と日本人が相互に親善、協和する様子が描出されている。

他方で、作品で浮上した指導民族としての優越感や、愚昧で滑稽な苦力像は、春子のコロニアリズムの現れと指摘しなければならない。春子の描く〈民族協和〉は、こうした優越感と苦力像によって裏切られている。〈民族協和〉〈王道楽土〉の〈夢〉を抱える野村がコントロールする側であり、全てを受け入れ反抗しない苦力は、植民政策の論理に包摂された存在であったといえよう。実際のところ、苦力と野村との間の不平等な関係を春子が意識していたと考えられる。それにもかかわらず、苦力に対する描写は、ただ外貌や行動など表面に止まって彼らの内面を語ることはない。

また、「苦力」と名付ける小説にもかかわらず、結局日本人監督である野村に重点をおき、彼の行政成功譚のようになっている点も見落とせない。素朴で清新、公明正大かつ人情味あふれる野村の姿を浮き彫りにするのは、〈王道楽土〉〈民族協和〉を掲げる満洲行政に合致するもので、当時の日本人官吏の

目指すべき模範として造型されたものに他ならないと言えよう。

春子の人生で最も脚光を浴びた時代は、満洲国の崩壊とともに去った。入隊した夫が一年近く生死不明で、幼い三児を連れて一年近く逃難行を続けた春子の戦後は、決して順風満帆とはいえなかった。その後の作品には、彼女は満洲の思い出にある種の郷愁を寄せる一方で、満洲時代を「重い鎖」とも表現している。戦後二十年以上を経て、春子ははじめて、他民族を支配しようとするコロニアリズムの本質を認識した。彼女は、「ある微笑－日中不再戦植樹に思う」（1969年）というエッセイの中で反省している。「自分にとっては満州とはなんだったろうという問いかけがはじまったのは正確にいうと日本に引き揚げてきてからである。満洲国が日本の大陸侵略のための虚構の国であったことは確かである。そして私たちはうかうかそれに乗った愚かな庶民の一人であったことも疑問の余地はない。そのくせ片方では、何人もの青年がまるで“革命的”熱情をかけるように『王道楽土』の精神に自分を賭けて辺地で死んでいった事実を忘れることかができないでした。まだ私はこの土地とそこの人たちを深く愛していると信じていた。辺地で死んでいった青年たちの精神は無垢であり、私の愛情もまた『侵略主義』とは関係ないのではないかと、たえず心の底でつぶやかずにおれなかったのである。…（中略）…それが私の思いあがりとエゴイズムであったこと、また他民族が他民族を支配することにはどのような正当な理由もありはしないことに気づくのに、恥ずかしいことながら私は二十年近くの歳月を費やしてしまったのである」[28]。

〈民族協和〉〈王道楽土〉が高らかに唱えられる時局の下、「うかうか」国策に沿い、ナショナリズムに止むをえず同調した春子の一生は、矛盾に貫かれたものだと言える。にもかかわらず、春子は「満洲」と「満洲の人」を深く愛しており、その心底には、苦力へのヒューマニズムと愛情が揺るがず存在し続けていたのである。

付記

※「苦力」などの作品の本文引用は、『牛島春子作品集』（ゆまに書房、2001年）による。なお、傍線は本稿の筆者が加えたものである。

注：

[1] 川村湊 『異郷の昭和文学－「満洲」と近代日本－』岩波書店、1990年、23-25頁参照。一つ目は満洲を旅行し、その印象や感想や取材したことがらを紀行や創作として発表した一群の文学者たちである。三番目は、満洲に生まれ、育ち、そして戦中、戦後において日本列島に引き揚げてきた人々、およびその家族ということである。

[2] 管見の限り、同時代における春子の「苦力」にたいする評価は存在しない。近年になると、作品に関する研究も、城西国際大学大学院の鄭穎の博士学位論文『牛島春子研究－「満洲」は彼女にどう作用したか』の一節「牛島春子の捉えた「苦力」－水上勉などとの対比に即して」と、台湾学者の林雪星「牛島春子の作品における満洲国の労働者－「張鳳山」と「苦力」からみる」の二つのみである。前者は、ポストコロニアリズムの視点から、春子の描いた苦力像を、水上勉らが作中で描いたものと比較しながら、検討している。後者は、春子の二つの作品を比較しながら、春子の描いた労働者像の特徴を分析したものである。本稿は先行研究を踏まえた上で、苦力からみる〈民族協和〉を中心に検討する。

[3] 坂本正博 「牛島春子年譜第二稿」『敍説Ⅱ（3）』、2002年１月、205-207頁参照。

[4] 鹿子木員信は当時の日本主義の指導者の一人であり、超越的な国体論を唱え、晴男が大同学院に入学した７月初旬に「皇国主義」を題した講義も行っていた。彼の思想は多分に青年期の晴男の思想形成に影響を与えたと言われる。（坂本正博「拝泉へのまなざし－旧満州での牛島春子の作品（上）」『敍説Ⅱ（2）』、2001年８月、156頁参照）

[5] 春子の姉マスエの夫である。

[6] 坂本正博「拝泉へのまなざし－旧満州での牛島春子の作品（上）」『敍説Ⅱ（2）』、2001年８月、154-156頁参照。

[7] 大同学院は昭和６年９月の満洲事変の後、関東軍が治安工作の統一機関として設置した自治指導部を前身とし、満洲国創立後の昭和７年７月、大同学院と名称を変えていた。軍人のような卒業生は県参事官として各地に派遣されたので、満洲国の若手官吏養成所といえる学校であった。満洲の学校要覧に記載している「大同學院教育内容」（康徳７年度第一部生）によると、学科及び講義の内容は、１建國科、その中には建國論は（日本精神論、建国精神論、王道論）、また学院の方針は「建国精神即チ日滿一徳一心、民族協和、王道楽土、道義世界の認識２建國思想ノ實現ニ獻身殉國ヲ惜マザル熱烈ナル気魄及實踐力ノ陶冶鍛錬」としている。（「満洲国」教育史研究会監修・編集『「満洲国」教育資料集成』エムティ出版、1993年、693-694頁、763頁参照）

[8] その前、結婚式は久留米で行われたのである。（多田茂治 『満洲・重い鎖－牛島春子の昭和史』、弦書房、2009年、102頁参照）

[9] 田中益三は1993年春子にインタビューしたため、ここでは田中の記述を引用している。（「牛島春子の戦前・戦後」『朱夏』18号、2003年６月、94頁）

[10] 西田勝 「『満洲行政』文芸欄を読む」『植民地文化研究（7）』2008年、77頁参照。

[11] この時期、晴男は大同学院に在学していたため、投稿はそこでの研究の成果であると推測される。

[12] 坂本正博 「牛島春子年譜第二稿」『敍説Ⅱ（3）』2002年１月、207頁参照。

[13] この点について鄭穎の論文の中でも言及したが、夏目漱石の苦力イメージについての具体的な分析は、拙論「夏目漱石「満韓ところどころ」における満洲クーリーの表象」の中で行った。

[14] 林雪星、前掲論文、72頁参照。

[15] 平林たい子の苦力像について、拙論「平林たい子の「敷設列車」における「苦力」表象：プロレタリア文学と「満洲」の労働者へのまなざし」で考察した。

[16] 板垣友子　博士学位論文『近代日本における中国語教育に関する総合研究－宮島大八の中国語教育を中心に－』大東文化大学大学院、2013年、71-130頁参照。

[17] 林雪星、前掲論文、74頁参照。

[18] 満洲観光連盟により発行された機関報である。

[19] 銅貨２枚（２銭）。

[20] 銅貨５枚（５銭）。

[21] 林雪星、前掲論文、75頁参照。

[22] 川村湊　『文学から見る「満洲」－「五族協和」の夢と現実』吉川弘文館、1998年、18頁参照。

[23] 鄭穎、前掲博士学位論文、149頁参照。

[24] 坂本正博　「牛島春子年譜第二稿」『敍説Ⅱ（3）』2002年１月、208頁参照。

[25] 鄭穎、前掲博士学位論文、149頁。

[26]「祝といふ男」に関する先行研究は多くて研究方向も多様であるが、「民族問題」の範囲で考えるのは、尾崎秀樹の評論、と尹東燦の「牛島春子『祝といふ男』論」がその代表として挙げられる。尾崎秀樹は作品から民族協和の困難さが反映されたことを指摘した。尹東燦氏は「祝」が日系職員に嫌われる原因を差別的「民族協和」観によるものだとの見解を示した。それ以外の研究は、全体的に「祝」の複雑な人物像そのものの分析に集中する。人物像から見られる春子の異民族の人への捉え方と、彼女の〈民族協和〉への理解と内面的矛盾は見落とされている。本稿の議論は、その点に着眼している。

[27] 初出不詳。随想集『ある微笑』に収録、創樹社、1980年、18頁。

[28] 同書、20-21頁。

参考文献

板垣友子　「官話教科書の日本語訳に関する考察」『日中語彙研究（5）』（愛知大学中日大辞典編纂所、2015年）

尹東燦の　「牛島春子『祝といふ男』論」『「満洲」文学の研究』（明石書店、2010年）

牛島春子　『牛島春子作品集』（ゆまに書房、2001年）

牛島春子　『ある微笑』（創樹社、1980年）

尾崎秀樹　「〈満洲国〉における文学の種々相」『近代文学の傷痕』（岩波書店、1991年）

多田茂治　『満洲・重い鎖－牛島春子の昭和史』（弦書房、2009年）
川村湊　『異郷の昭和文学－「満洲」と近代日本－』（岩波書店、1990年）
川村湊　『文学から見る「満洲」－「五族協和」の夢と現実』（吉川弘文館、1998年）
坂本正博　「拝泉へのまなざし－旧満州での牛島春子の作品（上）」『敍説Ⅱ（1）』（花書院、2001年１月）
坂本正博　「拝泉へのまなざし－旧満州での牛島春子の作品（下）」『敍説Ⅱ（2）』（花書院、2001年８月）
坂本正博　「牛島春子年譜第二稿」『敍説Ⅱ（3）』（花書院、2002年１月）
田中益三　「牛島春子の戦前・戦後」『朱夏』18号（せびら書房、2003年６月）
鄭穎　『牛島春子研究－「満洲」は彼女にどう作用したか』（城西国際大学大学院人文科学研究科、2015年）
西田勝　「『満洲行政』文芸欄を読む」『植民地文化研究（7）』（植民地文化研究会、2008年）
西田勝　「『満洲行政』文化系主要目次」『植民地文化研究（7）』（植民地文化研究会、2008年）
「満洲国」教育史研究会監修・編集　『「満洲国」教育資料集成』（エムティ出版、1993年）
林雪星　「牛島春子の作品における満洲国の労働者－「張鳳山」と「苦力」からみる『台湾日本語文学報36』（台湾日本語文学会、2014年）